

酒飯論絵詞

(六)

八木 意知男

(京都女子大学短期大学部教授
裏千家 家学 園講師)

(翻刻)

中左衛門大夫仲成申様

上戸も下戸もさままゝに其徳あまた侍れ

ともうき世のありさまをみるに中戸に

ましたる物なし あまりのまぬも興なし

大食するも目さまし されはとの始

のころほひにも三こん五献そいミしけれ

大食上戸のもちくらひちかかつへして

みくるしや 酒ハはかりなし たゝ類にをよ

ハす 過たるも猶及ハさるかことし 是いにし

へのひしりのの給ひし中戸にあらすや

彼朱彦脩か飲食の箴にも人の身の

たつとき事ハいかんとなれハちゝはゝの

遺躰なり 口のために身をやふる 是父

母の不孝なり 口よくやまひをいたして

なんだちの徳をやふる ちをまもる事

もたいのことし 飲食をほとよくするは

易の象かつハ又ほとけの儀にもそむく

へし しかれば中戸のふるまひハめしにも



中左衛門大夫仲成申様
上戸も下戸もさままゝに其徳あまた侍れ
ともうき世のありさまをみるに中戸に
ましたる物なし あまりのまぬも興なし
大食するも目さまし されはとの始
のころほひにも三こん五献そいミしけれ
大食上戸のもちくらひちかかつへして
みくるしや 酒ハはかりなし たゝ類にをよ
ハす 過たるも猶及ハさるかことし 是いにし
へのひしりのの給ひし中戸にあらすや
彼朱彦脩か飲食の箴にも人の身の
たつとき事ハいかんとなれハちゝはゝの
遺躰なり 口のために身をやふる 是父
母の不孝なり 口よくやまひをいたして
なんだちの徳をやふる ちをまもる事
もたいのことし 飲食をほとよくするは
易の象かつハ又ほとけの儀にもそむく
へし しかれば中戸のふるまひハめしにも

酒にもよきほどにて一しやうかくてそ
わたりける よろつのいはひあそひにも酒
のなきには興もなし 又すきつるもいやし
食前食中食後までよきほどのさかつ
きにて心にまかせのミてこそ薬のさけ
ともなるへけれ 食すきたるもくるしげなり
酒のすきたるもなをくるし 人のよハひを
たもつにもおさあひ時ハあいらしきと
のミはかりなり きハめてとしの老たる
も顔色カハリすさましく中比人勢さかん
にてよろつのわさもやさしけれ 気の
すきたるもとりくるし おくするもいき
たらす よき比こそハいミしけれ 一とせ
をくるあひたにも夏のあつきもたへかた
し 冬のさむきも身にさむし のとけき
春や秋のころかたひらなともさしてきす
こそてかさねもむつかしくすわたひ
きたる衣しやうなととりかへきたるすか
たこそやんことなくそ見えにける されは
あめつちのあひたさへひてりつ、けハ民い
たみあまりふりても水いて、田野までも
そこないぬ よきなかはなる空なれはあめか
したまてをたやかなり 堯舜のいにしへハ
風枝をならさす雨つちくれをやふらす
民のかまともにきハひぬ ふうふ男女のかた



民のかまともにきハひぬ ふうふ男女のかた

(次頁へ続く)



かたし 風草葉をふけハ聲三ふの妙文を
となへ波ませきをうけてハひらき五ふの
大乘をあらハすと天台にもしやくせられ
ける仏法になにかもれこん 我身をはなれさ
とりなし自性法身あらハれて南無三寶ニミツ

世の中にすむ中成か

むねの中

三世のとくをさとりぬるかな

(現代語訳)

中左衛門大夫仲成がおつしやるには

上戸も下戸もさまざまに其の徳は沢山にあ
りましようが、浮世の有様を見守っている中
戸に過ぎたる者はありません。

全く飲まないのもおもしろくありません。
(そうかといつて) 大食するの**も**びつくりし
ます。

ですから(例えば)年始の頃にも、三献五
献はとも見られません。大食漢が餅を食べ
る様は、まるで飢えている様で見苦しいし、

上戸の酒ははかり知れませんが、ただ両者はく
らべようもありません。「過ぎたるも猶及ば
ざるがごとし」(とはこの事でしょう)。是は

古しえの聖がおつしやった「中庸」と言う事
ではありませんか。

彼の朱彦修の『飲食の箴』にも

人の身が尊いのは何故か、それは父母が
残した体だからだ。

飲食によって身を損う、これは父母に対
しての不孝である。

口はよく病気となって、あなたがたの人
格を傷つける。(時として口卑しくなっ
て品性を傷付ける、の意)

口を護る事は、たとえば瓶びんの様にすべき
だ。(瓶は常に一定量しか入らない、の意)
とあります。

飲食を程よくするのは易の教え、そして又、
仏の教えにも背くことになります。

そんな訳ですから、中戸の行いは飯にも酒
にも程良くて、一生かけて活かしていきたい
ものです。

万事の祝いや遊びにも、酒がないのは味気な
い。しかしまた過剰なものも卑しい。食前・食中・
食後まで丁度良い程度の大きさの盃で、楽しく

飲んでこそ「薬の酒」ともなりましょう。食べ
過ぎなものも苦しく、酒の飲み過ぎはなお苦しい。
人の齡を保つといった場合、幼い時は「可

らひもなかたちなくてあるへきか 上らうけ
らうも甲乙なり 中らうおハしまして
こそよろつのおひさつあるへけれ かの
ひえい山延曆寺天台大師ハ諸宗の頂上
なりしたに中堂薬師とあかめ給ひ
國家をまもり給ふ也 五天いつれもひ
ろけれども中天竺にあたりてこそ
佛ハ出世し給ひける 十方浄土の化佛
までこくうの中にけんし給ふ いはんや
二仏の中間の衆生として此ことハりを
しらさるハむへなり しかりとは申せとも
つらくうきよをおもんみるに上戸も下
戸も中なりも酒とみめしとみわけぬ
るもくちのまなこのわさなれハ同ならず
別ならず なしともいひかたしありともみえ

愛らしい、「可愛らしい」ばかりで良い。大層年
老いた人も顔色が変化してものすごい。中年の
人は勢い盛んで万事につけて優しいことです。

気配りし過ぎるのも苦しいし、気おくれす
るのもどうかと思われます。丁度よい程こそ
がすばらしいのです。

一年を送り暮す間にも、夏の暑さも耐え難
く、冬の寒いのも骨身にしみて寒いし、長閑
な春や秋の頃、帷子かたびらなどもことさらに着ず、
小袖こそでかみ襲あはせも着ぶくれして苦しく、薄綿を入れた
衣装などを取り替え着た姿こそ上品に見えて
すばらしい。

そこで天地の間でさえ、日照りが続けば民
は疲弊し、余分に降っても水が出て田野まで
損われます。丁度良い空であれば、天下安寧
です。(古き中国の理想的皇帝)堯・舜の昔は、
吹く風は木の枝も音を発せず、降る雨による
山塊の崩れは無く、民の窟くわも賑わった、(と
いい伝えられています)。

夫婦話や男女が(初めて逢うためには)仲
立(仲人・媒人)がなくては成り立ち得ません。

上臈と下臈にははつきりと区別があります
故、(間に)中臈がいらっしゃってこそ両者の
意思の疎通が成立するのではありませんか。

かの比叡山延暦寺の天台大師(伝教大師)
は仏教諸宗の頂上にいらっしゃるが、(その
大師は)中堂薬師を崇められて国家を護り
なさっていらっしゃる。五天は何れも広いけ
れども、中天竺にあったからこそ仏は出世な
さったのです。十方浄土の化仏まで虚空(つ
まりは中空)に現じなさった。その上、二仏
の中間の衆生として(存在する者が)この理
を知らなくても当然です。

そうだとはいっても、よくよく浮世を考え
るに、上戸も下戸も仲成も酒と見(あるいは)
飯だと見分けることは、所詮「土籠とこごの眼の業」
(目が見えず万事行きあたりばったり)であ
るから、同じことではないし、(かと言って)
別であるとも思われません。見える目が無い
ともい難く、有るとも見え難いことです。

風が草葉を吹けば、声は三ふの妙文を唱え、
波間は堰を受けてはひらき五ふの大乗を現わ
す、と天台にも釈せられる伝法に、どうして
漏れることがありますか、あり得ません。
我身を離れ、悟りに至り、自性法身顕われて、
南無三寶なむさんぼう

現世に住む仲成が、その胸の中で、三世
の徳を「中こそ肝要」と悟ったことだ。

注

1	最初の段落では「中左衛門大夫仲成」を「忠左衛門大夫中原仲成」としている。本章段には乱れがあると思われ、意味がよく通じない部分がある。
2	この部分、何らかの乱れがあると思われる。
3	ア、王者太平、則五日一風、風不鳴條、(王充「論衡」) イ、如「南山之寿、不 _レ 衰不 _レ 崩」、(「詩経」小雅、天保) ウ、たかき屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑はひにけり(『新古今集』仁徳天皇)
4	五天は、天竺(古代インド)を東西南北と中央の五つに区分したものを。釈迦は中天竺にいたという。

解説

今号は四段の詞書と絵、現代語訳を掲載いたします。
なお、今号で当館所蔵の『酒飯論絵詞』を全段紹介いたしました。

茶窓各号での紹介は次のとおりです。

- 三号 初段の詞書と絵、翻刻、現代語訳
- 四号 二段の詞書と絵、翻刻
- 五号 二段の現代語訳
- 六号 三段の詞書と絵、翻刻
- 七号 三段の現代語訳
- 八号 四段の詞書と絵、翻刻、現代語訳